ジャーナル

放射性物質以外、何もない

――十二年目を迎えた「3・11」――

『民の声新聞』発行者
鈴木博喜

●すずき・ひろき　1972年神奈川県生まれ。新聞記者を経てフリーの記者となる。「3.11」後の6月から福島に向かう。以降、被災地や避難者の声をウェブメディア『民の声新聞』で現状を伝えている。経費は読者からのカンパとアルバイトで稼ぐ。

あなたが暮らしている地域に「ないもの」は何だろう。

コンビニ？　スーパーマーケット？　郵便局？　路線バス？

久しぶりに訪れたその地域には、何もなかった。正確に言えば、すべてを奪われた。

誰ともすれ違わない

幹線道路を走る車はほとんどない。

道路脇に設置された看板には「注意　長時間の停車はご遠慮ください」と書かれているが、停車する車などない。

もちろん歩いている人もいない。

十二回目の「3・11」から一夜明けた今年の三月十二日、福島県双葉郡浪江町の津島地区を訪れた。東北新幹線の走る福島県中通りで避難生活を送る五十代夫妻に立ち入り許可を得てもらい、一時帰宅に同行した。

震災・原発事故発生当時、福島第一原発から約三〇キロ離れた津島地区には四三〇世帯、一四〇〇人が暮らしていた。それが原発事故でゼロになった。放射性物質で激しく汚されたからだ。

事故の概要も汚染の程度も、いつになったら自宅に戻れるのかも知らされず、ある日突然「西へ逃げろ」と命じられた。津島地区では二〇一一年三月十六日に毎時五八・五マイクロシーベルトもの高線量が計測された。しかし、住民たちがそれを知ったのはずっと後になってからだった。

「自宅に行くのは去年のお盆以来かな」と男性。津島地区は今なお「帰還困難区域」に指定されており、夫妻の自宅もバリケードの向こう側。自宅の様子を確認するにも、事前の許可申請やバリケードの解錠が要る。

隣町の川俣町から国道114号を走り、スクリーニング場に着いた。許可証の確認を受け、トランシーバーや個人線量計、防護服などを受け取る。トランシーバーはバリケードの開閉を担当する係員に連絡する際に使う。携帯電話がつながらない場合には緊急連絡の手段ともなるが、携帯電話の電波が届かないような場所で使えるかといえば、心もとない。

自宅に向かう枝道には、女性の係員が車で先回りして待機していた。解錠し、バリケードを両手で押し開ける。車が通過すると再び施錠された。男性が自宅から持参した線量計はピーピーと警報音を鳴らし続けていた。筆者の線量計は車内にいても毎時〇・七～〇・八マイクロシーベルトを示していた。

住民がいないのだから、誰ともすれ違わない。その代わりに、枝道に入るとサルの群れに遭遇した。逃げもせず、こちらをにらみつけるように一瞥した。彼らは放射能汚染や被曝リスクなど知るはずもない。一心不乱に何かを食べていた。運転席で男性が悔しそうに言った。

「ほらサルがいる！　こっちにも！　これがいまの津島の住人だよ……。久しく人間を目にしていないから、慣れたもんだ。こうやって車を停めても逃げもしない。逆にサルの方が『なんだおめえ』って俺たちににらみをきかせている。誰も住んでいない津島は彼らにとって〝天国〟なんだね……」

自由を謳歌しているのはサルだけではない。夫妻の自宅は玄関やベランダが厚い板で補強されているが、そうしなければイノシシに破られ室内を荒らされてしまうからだ。

夫が玄関の鍵を開け、補強板をまたいで室内に入った。筆者はベランダから靴のまま失礼した。久しぶりに人の重みを感じた床が音をたててきしむ。抜けてしまわないように注意しながらゆっくりと歩いた。天井を見上げればクモの巣が目に入る。顔にぴったりフィットする立体構造のマスクをしていてもカビのきつい